正倉院展

奈良国立博物館で開かれている正倉院展に行った。大阪難波から近鉄の快速急行で、朝早く開館の 40 分ほど前に会場に着いたが、すでに長い行列ができていた。私には、想定外であったが、長い列に並ぶ「常連さん」によると、これが毎年の正倉院展の風景だと言っていた。

写真下の『目録』に掲載の松本伸之・奈良国立博物館長「ごあいさつ」から。

昭和 21 年(1946)秋、正倉院宝物を広く一般に公開する「正倉院特別展観」が、奈良帝室博物館（現・奈良国立博物館）で開催されました。戦後日本の幕開けを象徴するかのようなこの展覧会は、好評を受けて翌年以降も実施され、やがて「正倉院展」の呼び名で親しまれるところとなりました。そして今年、第 70 回を迎える運びとなりました。

今回は、約 9000 件を数える正倉院宝物の中から、北倉 10 件、中倉 16 件、南倉 27 件、聖語蔵 3 件の 56 件の宝物が出陳されます。そのうち 10 件には初出品の宝物が含まれています。これまで正倉院展に出陳された宝物は延べ 5000 件近くに及びますが、未だに初出陳の宝物が毎年含まれており、このことからも、いかに数多くの宝物が大切に守り伝えられてきたかがよくわかります。長大な時の経過の中で継承されてきた正倉院宝物という稀有な遺産の存在に改めて驚嘆の念を禁じ得ません。……

「解説」によると、正倉院宝庫はもと東大寺の正蔵で、奈良時代の 741 年から 750 年ごろにかけて建立されたと考えられています。三角形の木材を組み上げた校倉造の建築で、北、中央、南の 3 部屋に分かれ、それぞれ北倉、中倉、南倉と呼ばれています。本来「正倉」とは穀物などを収納する倉をいいますが、東大寺の正倉院には奈良時代より宝物が納められ、天皇の封（勅封）や東大寺の管理のもと宝庫の開閉は厳しく制限され、宝物が守られてきました。

宝庫は毎年秋に 2 箇月ほど開封され、宝物の点検や調査が行われます。それに合わせ宝物が 60～70 件ほど選ばれ、奈良国立博物館で一般公開されます。

奈良国立博物館から東大寺に行き、初めて正倉院を訪ねた。正倉院の前に立ち、遠い奈良時代に思いをはせた。

（2018 年 11 月 4 日）